２１世紀の日本のかたち（７３）

東日本大震災から３年　（２）
ー岩手県の復旧・復興ー

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

１．現地を歩く

田老

三年ぶりに津波太郎の異名を持つ「田老」を訪れ、大津波に対して住民と財産を守るために町を包むように築かれた高さ10mの堅牢な防潮堤に登って田老湾とこれに続く太平洋を眺めました。

この日の田老湾岸にはワカメ加工場も造られており、少しずつ復旧のなった三陸の海岸の春の穏やかな昼下がりの風景でした。堤防の背後のかつての居住地区は、3.11の大津波で全壊しましたが、その瓦礫は片付けられ、復旧・復興へと次のステップに進もうとしている気配も感じられました。

それにしても、穏やかな海が一度牙をむくと、海の豊かな恵で生活している人々の営みを一瞬で破壊し、戦慄すべき地獄絵としてしまいます。

田老は記録に残っているだけでも４度の強烈な大地震津波がありました。まず江戸時代初期、慶長16（1611）年の慶長三陸地震津波で田老の村は全滅したという記録があります。そして明治29（1893）年６月15日、昭和８（1933）年３月３日、平成23（2011）年３月11日に巨大地震津波に襲われています。

3.11に田老を襲った地震津波災の映像を「学ぶ防災田老」のプログラムに参加して、田老総合事務所で見ることが出来ました。これは「たろう観光ホテル」の主人がホテルの最上階から必死の思いで撮影したビデオ映像（マスコミ非公開）です。

田老湾口から街をめがけてどす黒い海のかたまりが押し寄せ、田老の誇る長大な10mの堤防を楽々と乗り越えて、人も家も飲み込む映像に改めて胸の突かれる思いでした。「たろう観光ホテル」は大破しましたが、これを町では「震災遺構」として保存することに決めたとのことでした。

防潮堤の功罪

田老には昭和８年の大地震津波の経験から、居住地を囲むように堅牢な防潮堤を築き、これに交差し、海からの大津波を「ハ」の字にして受け止める高さ10m、長さ2,433mに及ぶ防潮堤を、昭和54（1979）年に完成しておりました。3.11の大津波では、まず「ハ」の字の防潮堤が叩き壊され、町を囲んでいた10mの防潮堤を黒い海は軽々と乗り越えてしまったのです。日本一の防潮堤とも万里の長城ともいわれていた防潮堤です。田老地区の復旧、復興計画として居住地の高台移転などと合わせて、防潮堤（14.7m）の再建が決まっ

ているとのことです。

田老の防潮堤

3.11震災前の、岩手県宮古市田老地区。黒で示されたX字型が、街を取り囲む海面高さ10mの大防潮堤である。
資料：「ウィキペディア」
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0%E8%80%81%E7%94%BA

防潮堤の功罪については住民の間にも意見がある様子です。「日本一の防潮堤ありと過信していたのではないか」「町を囲む高い防潮堤で、やってくる津波が見えなかった」「津波が湾口から町に来るまでに30分の時間があり、素早く高台に避難していればもっと犠牲者は少なかったのに」。いずれにしろ、津波太郎といわれた田老の被災体験はいろいろな教訓を残していると感じます。

田老地区の復旧、復興プランでは、居住地の高台移転を含め、被災地の土地利用も決まり前へ進もうとしています。その一つに「たろう観光ホテル」を震災遺構として保存し活用するプロジェクトが入りました。津波太郎の苦闘の記憶と記録は後世にしっかりと残ることでしょう。

この日の私は田老学習の後、復活した三陸鉄道（北リアス線）の単行列車に乗って宮古駅のある市街へと戻りました。

宮古では宮古湾を望む国道45号沿いに昨年12月にオープンした三階建てのホテル・ルートイン宮古に宿泊しましたが、復旧工事関係者の飯場のような雰囲気がありました。

宮古の歴史と文化を活かした復興まちづくりの提案

田老地区を含む宮古市三陸海岸の集落や市街地は3.11の大地震災によって甚大な被害を受けました。これに対して宮古市[注1)]もただちに宮古市東日本復興計画を策定し、減災の考え方に基づく多重防災型まちづくりを進めています。

現在、被災地の復旧工事の最中で国道45号にはひっきりなしにダンプカーが走っております。

今回の岩手県の災害復旧・復興の進展についての見学には、旧知の三宅諭岩手大学准教授が手助けをしてくれました。三宅准教授は3.11の発災当時から、被災したいくつかの市、町の復旧、復興計画に関わっております。

その中の一つとして、３年経った現時点の被災地復興の視点に、地域の歴史を見据え、文化の再興を企図する提案[注2)]があります。

宮古市の歴史－古代自然の中に海に向かうむらの出現、盛岡藩の外港として栄える宮古湊の形成、南部領内随一の繁華なまちの形成、これにつづく昭和初年の閉伊川河口部の宮古港を中心とした住宅、商業地、工業開発などの近代的都市形成の歴史を3.11の地震津波は大きく切り裂いてしまいました。

3.11から３年経った現時点で、東日本大地震災の復旧、復興を、地域の成り立ちそのものから問い直そうとする三宅准教授たちのアプローチ―「発見、認識、記録、修復、活用、保存」、そして「読み替える」をキーワードにしたやり方に大いに共鳴するものです。

いうまでもなく、東北のむらもまちも都市

も、幾度もの災害に見舞われながらもその復興の歴史があります。

発災から３年経った現在、大急ぎで作った各地域の復興計画も少し落ち着いて、きめ細かく見直すべき時であると感じます。

三陸鉄道再開

宮古の宿を地元のタクシーを頼み、早朝に三陸リアス式海岸を複雑な気持ちを持ちながら眺め、釜石へと向かいました。案内の地元出身の若いドライバーは道々、「海を喰らった」当時の壮絶な被災情況を話してくれました。今も親子三人の仮設暮らしとのことでした。

運行再開した三陸鉄道

戸沼撮影（2014.04.15）

宮古の隣りの山田町と山田湾、吉里吉里の波坂海岸、大槌海岸などに、そして釜石大観音のある釜石湾といくつものトンネルを抜けて走る国道45号沿いの海に立ち寄ってみました。いずれも大きく被災した人の住む海域です。

釜石からは開通したばかりの三陸鉄道（南リアス線）に乗って大船渡市の盛（さかり）駅までを地元の人々に交じって車窓を眺めながらの小さな旅でした。盛駅からこの日の目的地の陸前高田市まではＪＲ山田線が復旧しておらず、バスを利用しました。

陸前高田市（今泉・高田地区）の復旧・復興事業

陸前高田市[注3)]では、3.11大地震津波で自らも被災し、昨年10月に高台にようやく新築オープンした「キャピタルホテル1000」に宿をとりました。このホテルのベランダから、現在、復旧復興作業が急ピッチで進められている今泉・高田地区が一望することができます。

印象的なのは、今泉地区の山を削ってその大量の土を長大なベルトコンベアで高田地区に運び込み、これによって新市街地の基盤づくりを進めていることです。

大型ブルドーザーやダンプカーが行き交い、盛んに整地している大土木工事の現場を、目の当たりにしました。

なにしろ、高田地区では300haの土地を10ｍ～15ｍも嵩上げするというのです。

陸前高田市高田地区の復興現場

戸沼撮影（2014.04.15）

陸前高田市の震災復興計画は、３つの理念、「世界に誇れる美しいまちの創造」「ひとを育み、命と絆を守るまちの創造」「活気あふれるまちの創造」を掲げ、新市街地（今泉・高田地区）土地利用計画を策定して復旧・復興に当たっております。

しかし、当面する問題も多々ある様子で

す。

端的には工事費の急騰、工事従業員などの人手不足があげられています。

東日本大震災は岩手県だけでなく、宮城、福島県と広範囲に及びます。人手不足は行政側、自治体にも起こっています。

陸前高田市役所は3.11で被災し、プレハブの仮設庁舎で業務を継続しておりますが、大勢の職員も亡くなられ（300人中68名が死去）、現在、全国の他自治体から100名規模の応援を得て事態をカバーしようとしておりますが、絶対的に人材が不足している様子です。なにしろ、正常時においての年間予算が110億円であったものが、現在、1,500億円ということです。

陸前高田市の場合、ＵＲ都市機構が復旧・復興の業務全般の総合調整役に入っているのですが、これらの事情によって陸前高田市においても復旧復興事業の遅れと重なって、市の人口減少が更に進む心配もあります。場合によっては、当初想定した新市街地の規模と内容の見直しを迫られるのかもしれません。

長洞（ながほら）仮設集落

東日本大震災では三陸海岸の多くの伝統ある村や集落が被災しました。その中の一つでユニークな復興復旧をめざしている陸前高田市の長洞集落を訪ねました。

ここは広田半島の付け根にある58戸250人の半農半漁の集落で、58戸のうち28戸が全壊してしまいました。被災した長洞集落復興のユニークな点は被災地のコミュニティを分断させず、被災者皆のつながりを重視した、仮設集落づくり、暮らしづくりをしている点です。小さな集会所もあり、皆で仕事づくりにも挑戦しています。私の訪ねた昼下がりには、老人たちが集会所前のベンチで日向ぼっこをし、母親がこどもをあやしておりました。三陸海岸の居住環境は元来、スモール・イズ・ビューティフルな集落だと思うのです。

これには東京新宿に事務所のあるＮＰＯ法人復興まちづくり研究所（代表濱田甚三郎）が応援しております。

奇蹟の一本松

高田地区の工事現場には陸前高田市の復興理念に重なって「奇蹟の一本松」が立っております。

3.11東日本大地震津波によって広田湾岸に築かれていた陸前高田の中心市街地は壊滅的な打撃を受けました。この時の大津波によって広田湾岸の「国指定名勝」に選ばれていた７万本の松林「高田松原」も一瞬に流失したのですが、気仙川河口の松一本が奇跡的に残ったのです。全く、復旧・復興の希望の奇蹟の一本松です。

奇蹟の一本松

戸沼撮影（2014.04.16）

現存している一本松は保存プロジェクトに

よって上部の枝葉はレプリカで、幹を人工的に強化して自立させ、根をコンクリート基礎で固めたものでしたが、そのシルエットは奇蹟の一本松を写しとってしっかりとたっていました。今や奇蹟の一本松は岩手復興のシンボルとなっております。

２．岩手県の復興と未来像

第１期基盤復興期の実績

3.11東日本大震災から３年経った岩手県の復旧復興については、岩手県庁を訪ね復興局まちづくり再生課の遠藤昭人総括課長に話を聞く機会を得ました。

● 3.11被害の概要

人的被害

死者 4,672人

行方不明者 1,142人

負傷者 210人

家屋被災　全・半壊 25,705棟

産業被害　8,294億円

公共土木施設被害　2,479億円

●「いのちを守り、海と大地と共に生きるふるさと岩手・三陸の創造」をめざす岩手県の復興計画

第１期　基盤復興期間（平成23～25年度）

第２期　本格復興期間（平成26～28年度）

第３期　更なる展開への連結期間（平成29～30年度）

がちょうど第２期に入ったというタイミングです。

岩手大学の三宅諭准教授が同行してくれ、意見交換をすることができました。

岩手県の復興計画の柱は、

①安全の確保

②暮らしの再建

③なりわいの再生

の三つです。

第１期の総括として、①安全については、瓦礫の処理が100％終わり、宅地供給予定8,513区画のうち、7,453区画（87.5%）着工、178区画（2.1%）完成。しかし復興道路はかなり未利用区間が残っているようです。

②については、応急仮設住宅の入居状況は33,376人、災害公営607人、県内15,229人、県外1,724人、計50,936人。

災害公営住宅6,038戸のうち、1,699戸（28%）着工、467戸（7.7%）完成。

教育、沿岸部公立学校の被災校86校、復旧済60校（復旧率69.8%）。

③については、水産業の再生、被災数、漁船 13,271隻、養殖施設 17,139台、復旧整備完了数　漁船 6,250隻、養殖施設 17,139台、事業所の状況、再開済57%（1,017事業所／1,778事業所）、一部再開76.3%

被災事業所の抱える課題として、売上げの減少、利益率の低下、雇用・労働力の確保の困難などがある。

第２期復興に向けた具体的取り組みについて

①安全

・防災まちづくり　・防潮堤35.2km（第１期4.8km完成予定）

・交通ネットワーク―道路ネットワーク、ＪＪＲ山田線・大船渡線の復旧 など

②暮らし

・災害公営住宅

全体整備予定　6,038戸（第1期58戸、第2期5,950戸（98.5%））

・教育、県立高田高校の新築完了（平成26年度）など

③なりわい

・地域再生営漁計画　24漁協（第1期 3漁協、第2期 24漁協（100%））

・商工業　被災地域の事業者の経済再建や起業促進(起業・フォローアップ件数100件)

内陸地域と沿岸地域とのものづくりネットワークの連携・強化　など

（参考資料：「岩手県東日本大震災津波復興計画、復興実施計画（第２期）」岩手県復興局　平成26年４月）

第２期　本格復興期の課題

遠藤課長はこれまでの岩手の復旧・復旧について丁寧に概略の説明をしてくれましたが、当面の悩みは宮城県の場合と同様に、建設コストの急騰、工事現場、行政職員などの人材確保の難しさなどが多々あることです。

第２期（平成26～28年）迅速な復興のための主要課題は、

・被災地復興のための人材確保

・復興財源の確保と自由度の高い財源措置（国への要望）

（3.11後、３年を経た現在、被災者の住まい、なりわいに関するニーズが多様化している状況に合わせて）

・事業用地の円滑かつ迅速な確保

複雑な権利関係の調整可能な法整備など

第２期（平成26～28年）復興実施計画は332事業が想定されておりますが、応急的土木的普及で、少し落ち着きを取り戻した市民住民の多様な要望要求を、市民参加のまちづくりを前提にいかにすくい上げてゆくかが問われ、岩手県の復旧、復興も正念場にさしかかっています。

第２期復興実施計画・岩手県の未来像

三陸創造プロジェクト―

「長期的視点に立ち、多くの人々をひきつけ、多様な人材が育まれる地域として将来にわたって持続可能な新しい三陸地域の創造を目指す」には野心的なプロジェクトが並んでいます。

（1）さんりく産業振興プロジェクト

（2）新たな交流による地域づくりプロジェクト

（3）東日本大震災伝承まちづくりプロジェクト

（4）さんりくエコタウン形成プロジェクト

（5）国際研究交流拠点プロジェクト

この中で (3) 伝承まちづくりプロジェクトは、その復旧復興過程も含めて、日本中の人々にとっても岩手県の三陸は大きな学習空間といえます。(4) エコタウンプロジェクトも注目されます。

岩手県は県内のエネルギー需要の24%、電力需要の35%を自立分散型の再生可能エネルギーでまかなう目標を立てています。岩手県は原子力発電所のない県であり、全国のエネルギー政策の先頭に立ってもらいたいものです。

また、(5) のプロジェクトとしてILC（国際リニアコライダー（International Linear Collider：ILC））を核とした国際学術研究都市などが創られるならば、岩手県も東北もよほど元気になるものと大いに期待されます。

旅の終わりに

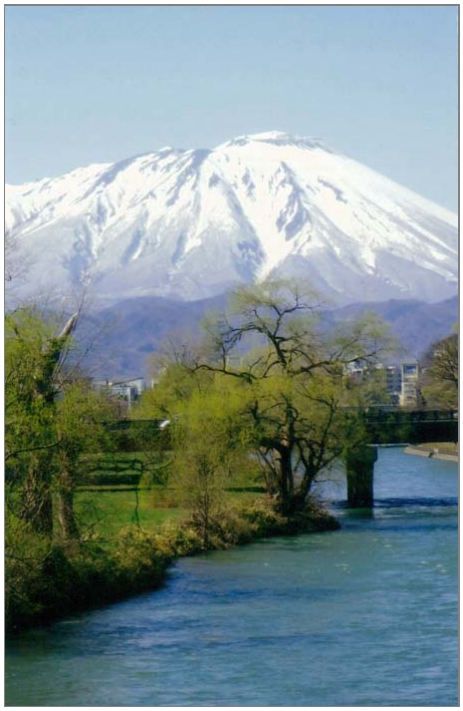
3.11東日本大震災後、東北の地を歩く度に、この地の自然と人々の暮らしにはある種の宗教性（精神性）を感じます。自然は時に超絶的な力が人間に迫りますが、穏やかな日常には海の幸、山の幸を人間にもたらし、人間を

包んでくれます。東北のまちやむらには今も、神仏を祀る空間が息づき、大きな祭りがあります。対照的にますます人工的になる巨大都市東京などの街と生活には無宗教性（精神性の希薄化）が広がってゆくように感じます。

このことはわれわれの現代文明生活に何か警告を投げかけているのかもしれません。東北の大自然が隣りに無ければ東京などそもそも成り立たないにちがいありません。

春へ向かう東北「いわて」への今回の旅もいろいろなことを考えさせられるものでした。

岩手県最高峰　岩手山



戸沼撮影（2014.04.17）

注1）

宮古市

人口	2011年2月末、60,124人、
	2013年12月末、57,459人
面積	1,259.89㎢

平成17年6月、旧宮古市旧田老町旧新里村合併

平成22年1月、旧川井村合併

注2）

「宮古の歴史と文化を活かした復興まちづくりへの提案―金秋ヶ崎・津軽石・中心市街地を中心に―」宮古市、地域の文化遺産を活用した復興まちづくり検討委員会（委員長　倉原宗孝岩手県立大学教授提案）2014年3月

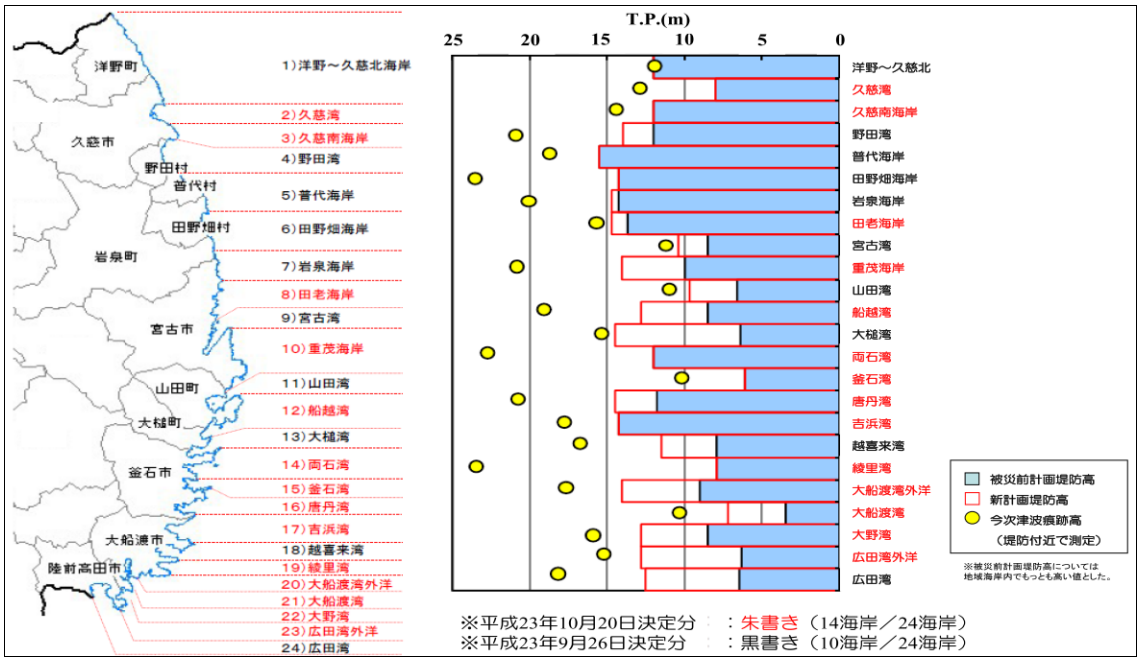
注3）

陸前高田市

人口	2011年 2月　24,246人
	2013年12月　20,565人
面積	232.29km^2

（2014.04.30）

岩手県沿岸における海岸堤防高さの設定状況



資料：「復興実施計画における主な取組の進捗状況」岩手県　平成26年２月